

(9) 「せん。やい」
(穿孔)

103×20×8 001

(1)~(8)は、頭部を圭頭に削り出し、両側端に二対の切り込みを入れ、下端を尖らせた卒塔婆である。墨書は全て「大般若心経」又は「大般若心経□」と考えられる。これらの卒塔婆の使用法として考えられる参考資料として、『修験深秘行法符咒集』十巻の中の一巻に項二七として

「般若心経の大事

玄辨三蔵、大聖文殊に授く。

梵篋印。初め摩訶より咒曰に追ふ時、外古印を結ぶ。

ギャティギャティ、ハラギャティ、ハラソギャティボデイソワ

カ 身蛇帝王、立ち処に身を失ひ畢る。其の時、八度の大般若渡し畢る。」

という記事がある。即ち、悪鬼王である身蛇帝王を退けるために般若心経を八度読むという行法があるという内容で、当遺跡出土の卒塔婆も、一度般若心経を真読することに一本の卒塔婆をたて、八度で八本の卒塔婆を使用した可能性が考えられる。八本の卒塔婆を立て、人形、刀形、陽物などもあわせ、悪鬼調伏の祓いの儀式が行われ、終了後に、溝に祓い流されたものと考えられる。

(9)は、組合せ糸巻きの横木の一枚に墨書されたもので、他に糸巻きの梓木も一本出土している。

木簡の名称、及び関係参考資料については、水野正好先生から御教示を得た。

9 関係文献

立山町教育委員会『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』（一九八七年）

(北川美佐子)

